

C E L の再スタートにあたって

エネルギー・文化研究所（C E L）の創立 14 年目を迎え、この 4 月に所長が古館から安達にバトンタッチいたしました。伝統を引き継ぎながら、新しい視点も取り入れて C E L の研究活動に取り組んでまいります。これまでと同様、C E L に対して暖かいご支援・ご指導をお願いいたします。なお、古館前所長には顧問としてコーチ役をお願いしています。

今、C E L がささやかな再スタートを切るにあたり、若干の道しるべをしておこうと思います。

私どもが自ら掲げる C E L のミッションは、将来にわたり大阪ガスグループが社会のお役に立つ存在であり続けられるように、社会の状況、動き、未来のあり方を多面的に研究し、社内外に提言していこうというものです。そのために、組織的な位置づけは社内スタッフ部門であっても、その枠組みから一步踏み出して、次のような姿勢で研究活動に取り組みたいと考えております。

まず、できる限り長期的な視点から研究テーマを選定することです。第二に、お客さまとガスグループの直接的な関わりというよりも、むしろ両者を含んだ「社会」そのもののあり方に着目したいということです。そして最後に、基礎的・理論的なアプローチとともに具体的な行動に結びつく実践的なアプローチの 2 つを研究の両輪とすることです。

もともと大阪ガスグループは、都市ガスをはじめとするエネルギーを複合的に供給するエネルギー関連事業、ならびに都市生活における様々なニーズに応える都市ビジネス関連事業を幅広く展開し、これらの活動を通じて、豊かな暮らしの創造や産業の振興、地域社会の発展に貢献したいと願っている企業群です。

C E L は、こうしたグループの方針に沿いながら、必ずしも企業の立場にとらわれずに、企業と社会の「より良き関係」を築くという視点を基底に据え、「より良い社会とは何か。そしてその社会の中でガスグループがどのような存在であるべきか」を問いながら、私たちがなりの提案をしていきたいと思えます。

このような基本的な考え方のもとに、C E L は当面、「エネルギー」「環境」「都市」「住まい・生活」の 4 分野を研究対象といたします。そして、社内のみならず他の研究機関や行政・大学・研究者・N P O をはじめ、様々な方々とのネットワークを広げ連携を強めながら、将来を見据えた諸課題に取り組みたいと考えております。

今、C E L を問う

そうした文脈の中で、本誌（季刊誌 C E L）の編集にも若干の手を加えます。

まずテーマについて、本号では「都市」の問題を、そのあと順次、C E L の研究領域で

ある「住まい・生活」「環境」「エネルギー」の問題を取り上げます。そして1年かけて、これらの研究領域において、特に何が現代的課題として抜本的な解決が求められているのか、またその中で、CELがどんな視点でこれらの課題に取り組もうとしているのかを整理してまいります。その作業を通じて、CEL独自の視点を浮かび上がらせることができれば、というのが私どもの目論見です。それがうまくいくかどうか、前置きが長くなりましたが、ともあれ第一陣が出発することといたします。

.....

都市を考える

都市と農村の成り立ちの違いを浮き彫りにするために、「神は農村をつくり、人間は都市をつくった」と言われることがある。農村も、実際には人間の手が加えられ、改良を積み重ねてつくられたものであるが、しかし、農村はあくまでも自然を下敷きにし、そこでの日々の営みも自然に大きく依存している。それに比べて都市は、むしろ自然の影響（脅威）を排除する方向で、はじめから人工的につくられてきたものである。

ここで、都市の機能について、「人々が集い、住み、働き、学び、遊び、交流するための場として、そして交流の中から新しいものを発見したり、生み出したりするための舞台装置として、人間が意図的に作りだしたものだ」と定義してみることにしよう。都市は言わば、私たちの欲求、野心、願いを叶えるための文明の力（力）なのだ。こうした目的のために生み出された都市は、今度は周りから人々の欲望を次々と吸収することによって、まるで生きもののように自らの成長を遂げてきたのである。

都市の機能はそればかりではない。例えば、競争に敗れ他者との交わりに疲れたとき、人は都市の雑踏の中に紛れ込み、ひとときの休息を得ることができる。そして、やがて呼吸を整え体勢を立て直したのちに、再度挑戦すればよい。そうした匿名性の自由も都市には許されている。また、農村特有の濃密なコミュニティを手放す代りに、求めれば新しいコミュニティ（ネットワーク）をつくるチャンスもないことはないのである。

ところで今、都市はどのような口調で語られているのだろうか。かつてあったような華々しい「明るい未来都市論」はやや影を潜め、むしろ「都市問題」という言葉に象徴されるように、マイナスのイメージで語られることが多いのではないだろうか。いわく、都市の過密問題、安全、環境、コミュニティの喪失の問題、等々。少なくとも、成熟社会に足を踏み入れたわが国においては、今後の都市づくりの中心的課題は、白紙の状態から未来都市の絵を描いてそれを実現することではなく、都市を巡って現に生じている諸課題をひとつひとつクリアーしながら、あるべき都市像に向かって既存の都市をつくりかえていく地道な作業の積み重ねこそ重要視されているように思われる。

そこでもう一度、「神は農村をつくり、人間は都市をつくった」という冒頭の言葉に立ち戻ってみよう。都市は、私たち人間がつくりあげてきたものであるだけに、これから私た

ちの意志と努力によってつくり変えていくことも可能なはずである。

都市の身体

ここで、都市を人間の身体になぞらえてみたい。人間の身体も都市も生きものであり、常に成長の途上段階にある。もし不具合なところがあればきちんと手を施すなり、機能を鍛え直すなりして、私たちがもっと生き生きと活動できるような土台づくり、舞台づくりをしていくべきであろう。

具体的に見てみよう。まず都市の‘頭脳’とは何か。政治や経済面における中枢管理機能が都市の頭脳にあたると考えるのが差し当たり順当なところだろう。グローバル化が進む社会においては、都市の頭脳を今まで以上に明晰にし、強化することが求められる。次に、都市の旺盛な経済力が、都市全体を支える‘足腰’の部分に相当すると思われる。産業の活性化、商店街の再生、ベンチャー企業の振興など課題は多い。さらに、足腰がしっかり安定するためには、‘土台’である大地が堅固でなければならず、それには都市が安全であり安心できる基本構造になっていることが不可欠である。一方、都市の‘顔’は、端的には景観である。景観は現在、集客のための魅力ある都市づくりに欠かすことのできない重要な要素になっている。内から滲み出る魅力こそ本物の個性であることは言うまでもないが、それは自ずから顔にもあらわれるものであろう。いずれにしろ、景観に魅力を感じられないまちには、人は足を踏み入れる気があまりしないのである。そして人間を他の動物から区別し、独自の道を歩ませるのに大きな役割を果たした‘手’の働きは、都市の持つ技術力や文化性であると言ってよいかもしれない。

さて、これまで都市の頭脳、足腰、それを支える土台、顔、そして手と見てきたが、まだ触れられていない身体の部位がある。どこであろうか。大きなところ言えば、それは‘胴体’であり、これは都市では居住にあたるものではないかと思われる。近年、都心部から郊外へと居住の中心が移り既存市街地の空洞化が進んでいるが、これはひょっとすると、身体の中核である胴体の部分がやせ細っていくことを意味するのではないだろうか。都市とは、「みやこ」と「いちば」という文字から成り立っているように、語源としての都市は、政治と経済の中心地をあらわし、居住あるいは生活という側面が想定されていないのかもしれない。しかし、初源はともかく、現在の都市の核心的な課題の一つが、快適で豊かさを実感できる住環境の提供にあることは疑うことのできない事実である。

都市の有機的な働き

都市の再生のためには、胴体を含めた都市の身体の各部位が、それぞれの機能を回復し、強化されることが大切である。しかし、それだけで十分なのであろうか。人間の身体の場合、各部位がどんなに鍛えられ、それぞれがいかに大きな力をつけても、そのことだけでは身体全体のパワーアップに結びつかないことがある。生身の身体は、それを構成する各部位の有機的な連携や全体のバランスがとれて、はじめて力を発揮するようにできている。

一面に偏った身体の強化策はむしろ、身体全体の活動を弱めてしまうことすらあるのである。

都市づくりにおいては、その点大丈夫であろうか。各部位の強化とともに、各機能の有機的連携や全体のバランスを考慮した都市づくりが行われているのだろうか。

近年、都市のパラダイム転換が進んでいる。かつての都市計画においては、都市への人口集中に対応するために郊外部の市街化をいかに効率よく進めるかが主な課題であった。ところが都市が成熟化し、都市計画の課題が既存市街地の再整備に軸足を移した現在、その土地に固有の事情を踏まえたきめ細やかな対応が必要になってきている。固有の事情とは、その土地に長年にわたって蓄積され形成されてきた産業構成や生活習慣、風土、地域文化などの総体であり、従って単に都市の各機能が強化されても、それらがその土地固有の条件の下で有機的に結びつかなければ十分な効果が上がりにくくなってきているのである。

都市のパラダイム変換のもうひとつは住民参加の要請である。生活に密着した既存市街地の再整備のためには、住民自身が発案したり、そうでなくとも納得できるものでなければならぬ。また、合意されたことについては住民自らが従う必要がある。そのために都市づくりの立案から実践に至るまでの各段階で、住民参加がますます大切になっている。

これまでの都市づくりの推進主体は、「都市計画」の策定推進者あるいは公共事業推進者としての行政であり、デベロッパーや大規模社有地を活用しようとする大企業等であった。しかし現在は、行政や大企業に加えて住民、地域に密着した産業、商店など、その地域とともに歩んできた様々な関係者が参加し協議しながら進めるのでなければ、都市づくりの実質的な効果が上がらない時代を迎えている。さらに、その土地の歴史性や文化性を生かしたまちづくりを行おうとすれば、そうした分野における有識者やまちづくりNPOの参加も欠かせない。こうして行政、企業、有識者、住民、NPOなど多くの関係者が持てる智恵を出し合い協力すること、そのための良きパートナーシップをいかに構築するかがこれからの都市づくりの大きなポイントになるであろう。

「共」の場づくり

近畿大学の久隆浩氏はCEL52号誌上で、まちづくりにおける「共」の重要性について述べている。その主張をかいつまんで言えば、「現在課題となっている環境問題や社会問題に対処するためには、『共』の領域を拡大することが必要である。みんなでまちづくりを考え、活動していく、といったときの『みんな』が『共』であり、『公』すなわち行政でもなく、企業や個人としての『私』でもない第三の主体としての『共』の一形態がNPOだ」ということである。

これからの都市づくりには、まさに久氏の指摘するように、「共」の精神に基づいた取り組みが必要であると思う。そして行政、企業、有識者、住民、NPOのそれぞれが「共」の精神を差し出して、智恵を出し合い協力できるような仕組みづくり、つまり「共」の場

づくりを進めることが大切である。この「共」の場で、意見を持ち寄り議論を重ねることによって、次第に都市の各機能の連携がとれるようになり、都市全体のバランスが向上し、都市の総体としての実力が高まっていくのではないだろうか。

こうした「共」の場に持ち込まれ話し合われるのは、何も都市内部の問題に限らない。例えば地球環境問題への取り組みも、「共」の場で大いに議論されてよい論点である。都市という身体は、活動の結果として多くのCO₂や産業廃棄物、一般廃棄物などを発生させている。私たち自身の身体を見てもわかるように、排泄物の処理が適切に行われなければ、内部から身体の変調をきたすことになるし、また周辺の環境を汚染することによって外部からも悪影響を受けることになる。ひいては私たちの存立の基盤である地球の存続を危うくすることになりかねない。そして持続可能な地球を次世代に引き継ぐこともできなくなる。つまるところ、都市づくりにおいて地球環境問題に取り組むということは、次世代にも都市づくりに参加してもらおうということであり、それは「共」の場の拡張を意味するだろう。

CELの貢献

エネルギー・文化研究所も、こうした「共」の場づくりに少しでも貢献したいと願っている。都市づくりにおいては、一例として行政の総合計画やまちづくり計画の議論ならびに実践の場に積極的に参画し、企業の立場を離れて社会的視点や経済理論の視点あるいは生活者の視点から意見を述べ提言している。そうしたことを通じて行政や企業、市民、NPOなどとの間の橋渡しをすることができればと考えている。

季刊誌CELもまた、「共」の場づくりに向けての一つの試みである。本号では、当研究所の都市研究の一端を報告させていただくが、これらの底に共通して流れているのは、より良き都市づくりに貢献したい、そのために社会・企業・行政・生活者の間の架け橋になりたい、あるいは過去から現在そして未来へとつなぐ架け橋でありたいとの思いである。前段は言い換えれば、現に都市づくりに関わる人々にとっての「共」の場づくりであり、後段は世代を超えた「共」の場づくりである。これまで触れなかった点を補足すれば、「温故知新」(歴史に学び、その土地固有の新しい魅力を再発見・創造する)という当研究所のアプローチもまた、時代を超えた架け橋のための一手法と言えるであろう。

本号には、当研究所の他に大阪ガス社内とガスグループからも、まちづくりを巡る2つの報告をさせていただいた。ひとつはエネルギー・環境面におけるサステナブルな都市づくり、もうひとつは文化施設を軸としたまちづくりという視点からの考察であり、実践である。また、社外の学識者の方々には、各専門分野で都市づくりのための新しい視点を提起していただいた。

ベストセラーとなった乙武洋匡氏の「五体不満足」には、「障害は不便であるが、不幸ではない」というヘレン・ケラーの言葉を、氏が身をもって体現した記録が綴られている。この本を読むと、著者の明るさ、前向きの姿勢にまず驚かされ圧倒される。要は、人間にとって‘心’が一番大切なのだと思わされてしまう。

そこで最後にもう一度、都市の身体論に戻って問うてみる。都市の‘心’とは何か。ここまで来て、やっと答えが見つかりそうな気がする。より良いまちをつくろうという「共」の精紳が都市の心ではないかと。都市の身体にしかるべき心が定まって、都市の身体は完成する。都市が、対症療法的な処置だけでなく、抜本的な体質改善を図るためには、都市に新しい心が生まれなければならないと思う。

(なお、言うまでもありませんが、都市と人間の身体のアナロジーはあくまでもマンガ的なものです。例えば都市の頭脳について、ここでは政治や経済面における中枢管理機能に喩えましたが、実際の私たちの頭脳は心の領域をも含んだ人間総体の中枢管理機能を司っているものと思われます。)

以上